

月刊

# いじろのとも

第九卷

八月号

## 人間の勤め

人間の人間たるゆえんは  
人の心を感じるこころ  
でも

それは意識水準でのこと  
真に

それができるためには

無意識水準を

磨く必要がある

それが

修行・精進・努力であり

人間の勤めである

わがママがたくましさ

子のわがママを

たくまじさと

勘違いして

よいことのように

思う親の

なんと多いことよ

# 人生を考え直して

## みたい人は（五五）

『聖書』解説（三二）

マタイ福音書第七章を続けます。

二八 イエスがこれらのことばを語り終えられると  
群衆はその教えに驚いた。  
二九 というのは、イエスが、律法学者たちのよう  
にはなく、権威ある者のように教えられたから  
である。

「山上の垂訓」と呼ばれる部分の最後の締めくくりの  
ところです。

はじめの二八節は、イエスの教えを聞いて、群衆が驚  
いた、というだけです。次の二九節は、少し解説がある  
のではないかと思います。

群衆が驚いた理由が、律法学者のようにではなく、権  
威ある者のようであった、というわけですが、律法学者  
と権威ある者という対が何を意味しているのでしょうか。

そのことを少し考えてみたいと思います。

まず、律法学者ですが、それは、ユダヤ教の律法を研  
究して解説する学者のことです。こうした人は、宗教的  
に高い境地に達している訳ではありませんので、字句に  
執らわれて、ただ理屈を言うだけなのです。私は哲学は  
「こころ」で分かるものだと思いますが、理屈は、  
「あたま」でだけ分かるものなのです。あたまで分かっ  
ただけのことは、実践では、自分の「こころ」に、「貪  
り（慳貪）」や「怒り（瞋恚）」や「邪な見方（邪見）」  
妬み・恨みなど」のような執らわれが起こつたとたん  
に、どこかに吹き飛んでしまい、役には立たないのです。  
これまで、マタイの「山上の垂訓」を解説してきました  
が、その都度、これまでに、どうこれらの聖書の文句を  
解説しているのか、毎回十冊ぐらいいも目を通しましたが、  
律法学者の域を出るものに、私は出会いませんでした。  
まさに今、キリスト者自身が、律法学者に成り下がって  
いるように思えます。それは、イエス・キリストの境地  
に達していないからなのです。ただ、「あたま」で理解  
しているに過ぎないからです。このことは、なにもイエ  
ス・キリスト（聖書）の解説に限ったことではありません  
ん。老子にしても、ソクラテスにしても、釈尊にしても、  
みな当てはまっています。

私は、かつて「一字違いで大違い／学者（がくしゃ）」

に濁ありノ覚者（かくしゃ）に濁なし」という詩を作り  
ましたが、多くの学者は、ひたすらな「こころ」を磨く  
修行をしていませんから、こころに濁りがあるのです。  
ひたすらそれを磨いていくとき、こころは澄み渡って、  
私が四聖とする釈尊、老子、ソクラテス、キリストのこ  
とばや教えが、感動を伴って、あたまではなくこころに  
響いてくるのです。それは、律法に従っていて、律法に  
執らわれない、それを超えた境地に到っていることを示  
すものと言えます。

さて、律法学者の解説はこれぐらいにして、次の「権  
威ある者」に進みたいと思います。

ところで、そもそも権威とはなになのでしょう。私  
は、ずっとそのことが気に掛かっていました。

最近、あらゆる人に権威がなくなってきたら、私  
は、感じていません。宗教家にも、大学の教員を含めて学  
校の先生にも、医者にも、裁判官にも、官吏にも、政治  
家にも、財界の人にも、権威がなくなってきたら、  
そして、世間では、それが、よいことのように思われて  
いるように感じられます。本当にそれでよいのでしょ  
うか。

このことを考える手掛かりとして、ずっと前に読んだ  
ことがある、なだいなだ著『権威と権力』いうことを

きかせる原理・きく原理』（岩波新書）を、改めて  
読んでみました。そして、なるほど、なだいなだ氏も、  
権威も権力も必要としないで、自由に振る舞える社会を  
理想としていることが、分かりました。

これは、なにも氏が多く人の持たない特異な思想をも  
っている訳ではありませんので、多くの大衆の考え方が  
そうだということだと思います。

でも、それは、私の目から見ると、自己に閉じてい  
て、これまで何度も述べてきていますように、自己肥大  
・他己萎縮を示すもの以外の何者でもありません。

人間は、社会に（最終的には絶対他者＝神・仏・宇宙  
根源原理に）心理的に定位してしないと安心することが  
できません。幸せになることができません。もしそれが  
できていめんと、死に至る最後の最後まで、あがいて  
あがいて、悪をなしていかなければならないのです。

人間が真に自由であるということは、自分の思いどお  
りに何でもする、あるいは、できることではないのです。  
実は、人間は自分の人生を思いどおりすることはできな  
いのです。それは、自分の生まれと死のことを考えてみ  
れば明らかです。人は誰一人として、自分が生まれよう  
と違って生まれたわけはありませんし、自分の思いど  
おりの親の下に、思いどおりの人間として生まれている

わけでもありません。また、死も自分の望まないものなのに、勝手に向こうからやって来るものなのです。

自己肥大している現代人にとって、他者の権威や権力というものをきかされ、自由を奪われるように感じることは、我慢ができないことだと思えます。でも、何にも頼らないで、自由でいようとすればするほど、人間は不安になってくるのです。

前述しましたように、人は、社会（最終的には絶対他者）に定位していないと安心を得ることはできません。その定位すべき絶対他者が、真の権威なのです。それは、私の理論でいいますと、他己（人格＋感情の暢達）ということになります。そして、その権威に自分のすべてをまかすとき、はじめて自由自在になれ、安心が得られるのです。

その絶対他者は、あらゆる存在者を存在せしめた存在の贈り主です。あらゆる人に存在を許した、愛の権化なのです。その愛の権化に定位する（信じる）ことで、私たちは他者に真の愛を捧げることができるようになるのです。そして、その他者に対して愛を捧げるものが、人間では権威のあるものと言えるのです。

ここでいう「他者に対して愛を捧げるもの」、それは、子どもに対しては親であり、生徒に対しては教師であり、

信者に対しては僧侶であり、病人（患者）に対しては医師であると言えます。そういう人たちは、それぞれ愛をもつて、それぞれの他者に対してしているわけですから、この人たちのいうことは、強制されなくても、よくきくわけです。なぜなら、そうすることで安心が得られるからです。

でも、いまや親は子に愛を捧げませんし、教師は生徒に愛をもたなくなつて来ています。また、僧侶は、俗世の垢にまみれ、自分の生活（情動の満足）が第一となり、信者や人一般に愛を失っています。また、医師も、昔は医は仁術と言われましたが、今では算術といわれるほどに、患者に愛を持って接しなくなり、金儲け主義に陥っています。

現代人は、多くは信仰を失い、他者を信じることができなくなると同時に、他者に愛を捧げることができなくなつていのです。その分逆に、他者から愛を欲しがっています。つまり、子どもは親の慰み物（ペット）でしかありませんし、生徒は、教師が偉いと尊敬させるべき対象となつていのです。

二九節で「律法学者たちのようではなく、権威ある者のように教えられた」といいますのは、イエスが群衆に対して愛をもつて、教えを説いたからなのです。

## 自作詩短歌等選

### 物の尊厳

いま  
物の尊厳が  
問われなければ  
ならない

いま  
物を冒流し  
物を蹂躪し  
物を浪費し  
ているから

### 免罪符

気まぐれの  
ナムアミダブは  
自己墮落  
救ってくれる  
免罪符

### 権利には義務

人権と  
いう権利には  
服従と  
いうべき義務が  
伴わなければ

### 人の心を感じるころ

人の心を感じるころを  
他のことばで表せば  
仁  
隣人愛  
人間としての義務  
神の義を行う人の義

### 家庭教育の大切さ

子供時代の  
家庭教育  
悪ければ  
からだは大人  
こころは子供  
いくつに成っても  
みずから悩み  
周囲の人を  
悩ませる

### 無慈悲不寛容自我膨張

ある道徳科学研究所の  
キヤッチフレーズは  
慈悲寛大  
自我没却

これは  
実は  
仏の道

でも  
いまの日本人は  
無慈悲不寛容  
自我膨張に  
陥っている

## 自己主張の自由の平等

平等が  
自己主張の自由の  
平等に  
成り下がっている

## 閉塞感と自己肥大

いま  
日本人が  
閉塞感に陥っている  
という  
それは  
自己肥大させた  
当然の結果

## こころの栄養失調

からだの発達は  
子ども一人一人  
千差万別である  
それと同じように  
こころの発達も  
一人一人  
千差万別である

## 個性は他者との違い

世の中は  
個性  
個性  
と言っている

しかし

それを言うほど  
人は他者との  
違いを意識し  
社会から  
疎外されていく

## 隣人愛と大慈大悲

人の心を感じるこころは  
キリスト教では  
隣人愛  
仏教では  
大慈大悲

## 人の悪口

人の悪口を  
言う人ほど  
人から悪口を  
言われたくない

いま

多くの人は  
こころの栄養失調に  
おちいついて  
発達がとても悪い

# 自作随筆選

## 死の病原体プリオン

七月十九日（日）付けの毎日新聞「今月の本棚」欄にリチャード・ローズ著『死の病原体プリオン』（草思社刊）の書評が載っていました。

私は、エイズの流行を、人間の「性のふしだら」に対する神（仏・自然）の警告と受け止めています。現在の、科学・技術万能、経済優先、生活エンジョイを最上の幸福とする、価値観への次の警告は、どんな薬でも治らない、そして、どんなにしても流行を防ぐことができない病気の流行ではなからうか、と言ってきました。

この「死の病原体プリオン」は、まさにそうした病気の流行を予感させるものの一つではなからうか、と思いました。

この書評の書き出しは次のようなものです。

「感染性スポンジ状脳症病原体。これに発病するままでは感染を確認する方法はない。まず歩行困難。つぎに震えと痙攣。発話が不明瞭。意識朦朧（もつろ）う）。運動機能が低下。ものを飲み込むことや排泄

もできなくなり、三カ月から六カ月という長い衰弱の果て、死に至る。患者の脳はスポンジ状になっている。予防法も治療法も、ない。致死率百パーセント。

この未知なる病原体を発見した、アメリカのスタンリー・プルシナー博士は、昨春秋、ノーベル医学生理学賞を受賞した。かれにより、前代未聞の不気味な生命体は「プリオン」と命名された。」

この病原体のもたらす病気は、テレビで話題になったあの狂牛病や、クロイツフェルト・ヤコブ病だという。

このプリオンが世界に流行する危険は、これに感染した動物を私たち人間が直接食べるだけではなく、その動物の廃棄されたものや内蔵を他の動物（家畜やペット）の餌（えさ）としたり、その糞尿を有機質肥料としたりすること、現在、高まっていると言います。また、最近話題になりましたように、角膜や脳硬膜の移植で、クロイツフェルト・ヤコブ病への罹患（りかん）が数十例報告されているとのこと。こうした世界的流行の危険は、移植だけではなく、プリオンに感染した人の「体組織」を使って製剤した薬によっても感染するとも言えます。なのに、感染を確定する方法は存在しないのです。その原因の一つは、潜伏期間の長さにあります。最低

十年から四十年以上だそうす。平均二十五〜三十年としますと、人の間での流行のピークは二〇一五年あたりになり、年間二〇万人が死んで行くことになるのだと言います。

「プリオンは倍率六万八四〇〇倍の電子顕微鏡で、棒状粒子の形で辛うじて視覚化されただけで、正体はなにもわかっていない。かれは不死身だ。三六〇度の高温、冷凍、放射線照射、強力な薬剤も無効。菌やウイルスではなくタンパク質だから、生体内で免疫反応がおこらない。小さすぎてどんな精密フィルターも通り抜け、毎分四〇万回転の遠心分離器にかけても分離できない。乾燥した脳の中でも生存し、紫外線にも強い。しかもウイルスのような遺伝子をもたない。生物すべてに共通するはずの核酸システムなしで、増殖進化変異をとげ、ゆるやかに残酷に着実に宿主を殺す。」

相対な存在は滅亡（死）を免れることはできません。いつか、必ず、終末を迎えます。それは、人類や生き物だけではなく、この地球にも当てはまります。

でも、人間自身の手でその時期を早めなくてもよいように思います。少しでも長生きしたいというのが、多くの人の願いなのでしょうから。

## 釈尊のごとば（七一）

法句経解説

（二四六、二四七）生きものを殺し、虚言（いつわり）を語り、世間において与えられていないものを取り、他人の妻を犯し、飲酒・果実酒に耽溺（ふけりおぼれ）する人は、この世において自分の根本（ねもと）を掘りくずす人である。

この偈は、仏教の有名な五戒をうたったものです。それらは、順番は違いますが、不殺生、不偷盗、不邪淫、不妄語、不飲酒、です。

しかし、この人間が生きていく上での基本をしめす戒律すら、現在では守られなくなっています。

それは、いまの中学生や高校生に典型的に現れています。

まず、不殺生戒ですが、この戒律には暴力の禁止も含まれています。最近の中高生の暴力傾向は、きわめて憂慮すべき状態にあるように思います。例えば、いじめはだんだん増えていきますし、凶悪化しています。また、次の不偷盗戒にも関わりますが、「おやじがり」と称して、集団でお金をもっていそいで、弱そうな中高年の男

性を襲撃し、お金を奪います。さらに、酒鬼薔薇聖斗事件は、いま若者が、きわめて残忍に動物を殺し、人を殺すことができることを示しました。

八月七日付けの毎日新聞は、警察庁がまとめたところによれば、今年上半年の殺人容疑（未遂を含む）で検挙された少年が、前年同期の2倍で、最近一〇年間で最悪の<sup>99</sup>人に上った、と報じていました。少年非行が凶悪化の一途をたどっているということです。

次の不偷盗戒ですが、前述の強盗事件が増えているだけではなく、もつと軽微で日常化していますのは、万引きです。これは中高生だけではなく、大学生や大人にまで蔓延しています。最近では、スーパーや百貨店などの小売店では、一定の万引き被害額を想定し、それを売価に含めているとのこと。

次の不邪淫戒ですが、性の乱れは、フリーセックスと呼ばれ、社会的に是認されているのではないかと思えるほど、ひどいものです。

その乱れの反映として、成人男子の少女への援助交際があります。日本ほど、少女たちが、性が大切なものだと思わない国はないようです。それは、大人たちの性に対する意識の反映以外の何者でもありません。

次の不妄語戒ですが、いま子どもたちが平然と嘘を

言うようになっていきます。かつて、オウム真理教の広報係が記者会見し、テレビで報道されましたが、嘘ばかり平然と述べていました。それを見た少女たちが嘘を後ろめたさも感じず堂々と言うのがカッコよいことと感じたのか、ファンクラブができたと言います。

いま、日本では「正直の徳」は死語になったのではないかと思われます。昔なら「嘘は泥棒のはじまり」と嘘を厳しく戒めましたが、いまはそんなことを言う人はほとんどいなくなってしまうのではないのでしょうか。国会中継は、ある意味でこの傾向に拍車をかけていると思われます。

次の不飲酒戒ですが、大人ではこの戒律は、酔わない程度の健康のために飲むお酒は禁止されているとは思いませんが、子どもでは、まさに飲酒（喫煙も含む）しないように戒めていると言えます。しかし、その子どもの飲酒・喫煙が、いま問題になっています。

つまり、若年者のアルコールやニコチン依存症が、いま蔓延と言えるほど広がっているのです。それが悪いことだという意識すら、ほとんどなくなっているのではないのでしょうか。

人々の規範意識が薄らいでいる現在、いくら子どもは酒や煙草をたしなんではならないと言っても、酒や煙草

を買うお金さえあれば、それを買うこと自体は、自動販売機もあり、子どもも禁止されているわけではありませんが、いくらでも買える訳です。法律では、二十才まで禁止されていますが、しかし、二十才を過ぎれば急に飲酒・喫煙がからだにより行為になる訳ではありません。

喫煙は百害あって一利無しですし、酒も多くの人は酔うために飲んでいますので、大概は健康を害するものとなっています。ですから、子どもではだめだと言ってみてもほとんど説得力はありません。

このように、次代を担う子どもたちが、この五戒すら守れなくなつて来ている現状は、日本にとってきわめて嘆かわしいことだと言えます。

この原因は、勿論、現代人の自己肥大と他己萎縮にあることは申すまでもありません。

(二四八) 人よ。このように知れ、  
慎みがないのは悪いことである。  
貪りと不正とのゆえに汝  
がながく苦しみをうけることのないように。

「慎みがないのは悪いこと」だと知れ、ということですが、現代社会にぴったりの警句だと思います。

前の偈でも述べましたように、現代人は「他己」を弱

め、「自己」を肥大させていますので、自己の欲望の追求に汲々としています。

義理を欠いても、少しでもたくさんのお金を貯めようとしています。何百年でももちそうな立派な家を建てます。

健康を損ねながらも、毎日のように美味しいものを食べていることを自慢にします。ですから、その裏返しとして、

そうしない人を食文化の貧しい人とせせら笑います。TPOに合った多くのよい衣装を揃え、それを持たない人を馬鹿にします。よい車に乗り、よい時計をもち、よい靴を履いて、満足してはいますが、「こころ」はいたつて

空虚で、そうした満足以外に、人生で人間として何が大切なことなのかは全く分かっていません。ただ、そうした欲望を満足させていることを自慢して、それを皆が立

派だと認めてくれることだけを願っているのです。

こうした人に、慎みなどという言葉は無縁です。そうした人は、日本人が美德として来た「謙譲」などという、

慎みの一つを表す言葉も無縁ですし、質素といった言葉さえも無縁です。資源を浪費し、自ら奢っています。

そうした心には決して真の幸せは訪れません。自らの貪りと、その為になした不正(善からぬこと)とに、い

つか、必ず苦しまなければならぬ時がくると思っています。

自分が虚しいと思うときが必ずくると思っています。

(二四九)ひとは、信ずるところにしたがって、きよき喜びにしたがって、ほどこしをなす。だから、他人のくれた食物や飲料に満足しない人は、昼も夜も心のやすらぎを得ない。

いわゆる「お布施」を頂くのは、多くは僧侶ですから、この偈は、僧侶を対象にしたものと言えます。でも、一般の人にも無縁ではありません。

たとえば、子どもは親の庇護によって、食物や飲料を与えられます。ですから、子どもはそれに満足しなければなりません。でも、現在では、それを子どもに教えている親は、滅多にいないと思います。いま、子どもから、対人関係を表す「ありがとう」という言葉と「すいません」という言葉が消えかけていますが、それは、親自身が、そうした意識がなくなってきたことの現れであると言えます。

私たちが、食物や飲料を入手するのは、多くは、スーパーやコンビニのような小売店を通じてですが、でも、その入手は、お金を払って買ったのだから、当然であると考えています。別段、感謝する必要はないように思っています。

でも、いま、日本の百姓は、他のサラリーマンに較べて著しく低い収入に甘んじながら、食料を生産しています。百姓の犠牲の上に、日本の繁栄があるといっても過言ではありません。

ですから、私たちは、食料を得るとき、日本の百姓に感謝しなければ、「ばち」が当たります。穀類の自給率は二十パーセント余りで、入手する食料の多くは、日本人が生産したものではないと言われるかもしれませんが、輸入した食料は海外から収奪したものと考えるべきです。私は、食料だけは、飢饉のような特別な事情がなければ、それぞれが自給すべきだと思っております。そうしないと、将来、食料不足になることは火を見るよりも明らかですので、食料をめぐる戦争がおこる危険がきわめて高くなると思っております。

偈に戻って、お布施をするのは「信じるところ」にしたがってである、とありましたが、人間は他者のために何かをさせて頂くことが、人間の人間らしさと言えるのです。それは、実は、他者を信じることなのです。そして、お布施をすることで、人間として、真に、「清き喜び」を得ることができるのです。また、信じられて、お布施を得ることは、まさに「安らぎ」そのものなのです。人間は、互いに信じ合うときだけ、幸せになれるのです。

後記

一、暑い日が続いています。お元気ででしょうか。  
 二、よい天気が続くお蔭で、サトウキビがとても順調に、ぐんぐんと伸びています。また、大豆も、今年は、芯をとめたせいか、葉が繁り、密に植え過ぎたのではないかと思えるほどです。  
 三、先月号で、「猿」が畑を荒らすと紹介しましたが、その後も被害が続いていました。あるお百姓さんが、スイカの収穫はあきらめたが、「犯人」が本当に「誰」なのか、捕らえて確認したいと、このあたりでは「ちゃんちき」と呼ばれるわなをしかけておられました。そのわなにかかったのは、実は、猿ではなくて「あらいぐま」ということでした。私が見たときは、撲殺されていました。手が、手や足の指が、長く伸びていて人間の手のような指でした。スイカに小さな穴をあけて、中を上手に食べていたのが、納得できませんでした。皆の話ですと、近所の動物園から逃げたものではないか、ということでした。でも、まだ一匹しか捕まっていないので、もっといるのではないかと、話しておられました。  
 四、このところ、毎日のように、かやを刈って、こえぐろにしています。今年は、下刈りを何度かしたせいか、とてもよくできています。ゼミ生の方が一人、なれない

ことで大変なのですが、手伝いに来てくれます。  
 五、さつま芋ですが、鳥（からす）が掘っていた横を掘ってみたところ、こぶし大のものが、既に、入っていました。でも、すべての株に入っている訳ではなく、地割れがしているようなところだけでした。いくつか掘って食べました。昨年十二月号で紹介したように、さつま芋をりんご用の発泡スチロールと段ボールの箱に詰めて貯蔵していたのですが、発砲スチロールのものは、気密性が高すぎて呼吸ができず、腐ってしまいました。段ボール箱のものは、ずっといたまないで、貯蔵できました。昨日、最後の一個を焼き芋にして、頂きました。

月刊 こころのとも 第九巻 八月号 (通巻 一四号)	平成十年八月八日 〒772 8502 徳島県鳴門市鳴門町高島 鳴門教育大学 障害児教育講座気付 (ひびきのさと 沙門) 中塚 善成 <small>（ひよ）</small>
本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名 ひびきのさと 口座番号 01610 8 38660	

